「実」から見た「学」

（一社）北海道開発技術センター　正会員　原　文宏
（一社）北海道開発技術センター　正会員　○伊地知　恭右

１．はじめに

「学」と「実務」．より簡略化すれば「学」と「実」といった様相を呈する論考は，時代・国・分野を問わず多数存在するように見える．そのうちの相当数の論考が，土木計画の「学」と土木計画の「実」の関係においても多分に参考になるだろう．しかし，シンプルがゆえに普遍的で，抽象度が高いがゆえに妥当性も高い，そういったものばかりを参考にしたところで，結局「実」の現場には届かない．

そこで，本稿では逆の道を辿ることを試みたい．「実」の現場で生じた個別的な事実，それに応じた実務者個人の行い，そして市民の反応，言わば「現場個別の物語」の中から，抽象度の高い「学」との関係性を手繰り寄せてみたい．

２．「実」の物語

「実」はすべて物語である．場があり，長期にも短期にも時間軸があり，複雑な関係性の上に登場する人物がいる．そこに自分が含まれる．空間・時間・人間（じんかん），すべてを紡ぐ物語．まずはその認識を確定させた上で，「実」において生じた物語の断片を記述してみたい．

（１）物語『サンプル１』

東日本大震災の約３か月後，とある市で震災時およびその後の移動に関するアンケートを実施した．当時の状況を把握したうえで，今後の災害時における対応，翻って平時において強化･改善しておくべきソフト施策，ハード施策を検討するための調査である．ある日，調査委託業者にクレームの電話が入った．「あの時の記憶をわざわざ思い出させるなんてあまりにも非常識だ」という趣旨だ．激高するあまり，調査票をやぶり捨てた上での電話であった．この電話に応じた担当者は，「震災の傷」に対する配慮が足りなかったこと，それは激高に値するものであることを認め謝罪をした．その上でなお，調査の意義についてできるだけ丁寧に説明をした．相手は聞く耳を持たない．それでも説明を繰り返した．どれほどの時間を要したかはわからないが，結果的に電話の向こうの市民は，破り捨てた調査票をテープでつなぎなおし，回答を返信してくれた．

調査サンプル１．集計･分析上はたったのサンプル１である．この１枚の調査票の有無は，業務上･計画上，意味をもたないに等しい．少なくともデータの上では．ただ，当の調査担当者，実務者にとってはかけがえのないサンプル１になった．

（２）物語『届かない情報』

とある市の中山間部で，同地区を運行する路線バスの廃止に伴い，コミュニティ交通の再編が行われた．高齢化率 50%の地区で高齢者の足として存在しているコミュニティ交通である．2 年間の調査と検討が繰り返され，再編後の本格運行が確定し，その周知活動が始まった．その中で，地区に在住する世帯を対象に運行内容をまとめたチラシを配布する活動があった．あるとき市の担当部署の電話が鳴る．同地区のおばあちゃんからだ．「路線バスがなくって，私たちはどうすればいいのでしょうか・・・」．担当者は手元のチラシをみながら丁寧に説明をした．「路線バスはなくなるけれどコミュニティ交通と別の路線バスを乗り継げば，中心部にも行けます．バスについてまとめたチラシをみなさんに配布中です」と説明した．電話の向こうのおばあちゃんは納得した上で，最後にこう言葉を添えた．「そういうチラシは息子が見せてくれないんです．自分独りでかけることを快く思っていないから．」

キーワード　実務，実践，実，学，物語
連絡先　〒001-0011　札幌市北区北 11 条西 2-2-17 セントラル札幌北ビル 3F　（一社）北海道開発技術センター
ＴＥＬ011-738-3363

© Japan Society of Civil Engineers

３．「実」の物語の解釈，そこから見える「学」との関わり

計画や報告書（つまり実務の一般的な成果物）の中には残らないこれらの断片．しかし，実の現場において，これらの物語の持つ意味は大きい．ここでは，その解釈を通じて，「学」との関係にまで考察を試みたい．

物語『サンプル１』に登場する実務者は，なぜ数理的計画論においては無意味に等しい１にこだわったのだろうか．それは社会（学）的計画論（藤井，2008）における目的，そこに生じる大義のため，簡易に言えば「社会に関与する実務者の誇り」といった領域の話だと思われる．より根源的には，社会（学）的計画論を意識する大前提としての常識「これはサンプル１ではない．一人の人間だ」という感覚であろう．つまり，この「１」に対する，数理的計画論における合目的的な振る舞いは「平謝りをして電話を切る」ことを許容するのに対し，「１ではなく人間一人として見る」社会（学）的計画論における合目的的な振る舞いは「真摯に向き合う」ことから逃れられない．ここに，実務者が心的に従属している「論・学」による振る舞いの相違が明らかとなる．

物語『届かない情報』は土木計画の中でもいわゆる公共交通のプランニングに一区切りついたときに明らかとなった事実である．「自分独りででかけることを息子が良く思っていない．だからチラシが配られても見せてくれない」．土木計画の「学」においては，この事実に向き合うにあたり地域コミュニティ論として取り扱うことを許容するだろう．一方で「実」の分野でこれを公共交通プランニングの延長として取り組んでいくことは難しいように思える．そこには（例えば福祉部署との）行政的な縦割りの壁があるからだ．しかし，先の物語のような「１ではなく一人」といった常識，換言すれば社会有機体説にも通じる社会学的視点（藤井，2008）を有する実務者であれば，この「一人のおばあちゃん」を捨て置かず，もう少し違う世界を見通してしまうだろう．例えば「公共交通でおでかけすることが本人にとっても家族にとってもポジティブで喜ばしい，そんな地域を目指す」と「書き換える」ことで市の交通政策の中に落とし込んでしまうだろう．これは現実の物語『届かない情報』を起点に筆者が創造したフィクションに過ぎないが，社会（学）的計画論「も」重視する実務者においては，このフィクションの展開に凡そご賛同いただけるものと信じる．なぜなら，我々は基本的にあきらめが悪いからだ．社会の複雑であること，実務者としての社会への影響力がちっぽけであることを認識してなお，「より良い社会の存在」を信じてこれに関与し続けるあきらめの悪い人種なのである．

４．まとめ

渋沢栄一は『論語と算盤』（2008；1927）において学問と社会の関係を考察するにあたり「あたかも地図を見る時と実地を歩行する時とのごときものである」としたうえで「（地図と）実際と比較してみると，予想外のことが多い」と注意を促す．本稿にあてはめれば地図が学，実地が実となろうが，これまで見たとおり，社会的計画論（学）も重視する実務者（実）であれば，予想外の事態にもしぶとく対応していく様子が窺える．つまり，「実」において一体となる「学」を選択さえすれば渋沢の指摘は杞憂となるのだ．

また，王陽明は知行の本体についてこう述べている（安藤，1922）「心的活動を試に知と行とに分けていへば，知と行とは一の体系をなし，倶に一者の発展で，知は行の始であり，行は知の完成である．故に一箇の知を説いてすでにおのづから行の在るあり，一箇の行を説いてすでにおのづから知もあるのである．」ここで知を学に，行を実に対応させるなら，学と実は合一でなければ，どちらも本来的ではない，こととなる．

さて，渋沢の指摘に敬意を表しつつも「杞憂ですよ」と安心していただき，王陽明が感得した知行合一に応ずる「学実合一」を目指すにあたって我々はどうあるべきか．最後に，亀井勝一郎（1965）が引用した『徒然草』第百十段，雙六の名人の知恵を参照したい．「勝たむと打つべからず．負けじと打つべき也」．消極性のもつ積極性，と亀井が評するこの名人の態度に，地道であきらめの悪い実務者の光を見出すのである．

参考文献

・土木計画学－公共選択の社会科学－，藤井聡，学芸出版 2008.
・論語と算盤，渋沢栄一，角川ソフィア，2008（底本：「論語と算盤」，渋沢栄一，忠誠堂，1927）
・王陽明研究，安藤正篤，明徳出版社，1922.
・人間の心得，亀井勝一郎，青春出版，1965.

© Japan Society of Civil Engineers